

高等学校部門 激戦を制し、箕面自由学園高等学校が7連覇を達成

JAPAN CUP2026チアリーディング日本選手権大会は、8月27日から4日間、国立代々木競技場第一体育館で開催された。大会最終日はディビジョン1の決勝が行われ、各部門ともに素晴らしい演技が繰り広げられた。

大会は2日間の合計得点（決勝の得点に準決勝の得点50%を加算）で争われ、高等学校部門は、箕面自由学園高等学校（大阪府）が2日間ともに大きなミスのない演技で優勝した。



決勝では如水館高等学校（広島県）が高等学校部門では最高得点となる273.5点を獲得、2番目は梅花高等学校（大阪府）の269.0、箕面自由学園は267.5、4位の目白研心高等学校（東京都）も253.5点を獲得しており、非常にレベルの高い大会だった。



2日間を振り返れば、やはり箕面自由学園の安定感が際立った。

一方で、初優勝を目指した如水館の一発勝負にかける集中力と完成度もまた高いものがあった。表彰式が終わってすぐ、如水館の選手たちに声をかけると、複雑な表情を浮かべていたのが印象的だった。

その胸中を、コーチがこのように代弁する。

「やっと、ここまで来ることができました。今までは（トップに）どうにか追いつこう、追いつきたいという思いでやってきましたが、追いつける、追い越せるというところまで来たのが分かったのがこの大会の決勝でした。ここまで来たんだから、次は絶対に勝ちます！」

選手たちが記念撮影をしているすぐ横で、コーチはそんな思いを伝えてくれた。悔しさとともに、ほんの少しの達成感がにじみで出ているような言葉でもあった。16人のうち男子選手2人を含んだチーム編成で臨んだ如水館は、力強さと美しさが同居する完成度があった。

決勝は目白研心、梅花が落下のない完璧に近い演技を披露。ぎっしりと埋まった会場のボルテージは最高潮に達していた。

前日の準決勝を2位通過していた如水館は、最後から2番目の登場だった。緊張感が高まる中で、選手たちは円陣を組み、目を見合わせながら深呼吸をする。最後の2分30秒にかける思いが、ひしひしと伝わってくるようだった。

高く、美しいトスから続く、全員が統一されたジャンプ。タンブリングは素早く、統一されており、乱れることはなかった。揺れないスタンツ、16人の心が1つになったダンス、流れるような数々の技。最後のフィニッシュに至るまで、練習の成果が演技に凝縮されていた。

前日の準決勝はトップが3回転しながら3層目に乗るトリプルアップのピラミッドと、2曲目のパートナースタンツでトップが落下する大きなミスが2つあった。それをしっかりと修正して、この日の決勝を迎えた。

決勝は1位ながら、総合得点（398.5）で届かなかったのは、わずか2点。



3年生のキャプテンは「決勝でノーミスができたことは嬉しかったです」と語りつつ、ずっと追いつけてきた初優勝を逃したことへの悔しさもあった。

「ジャパンカップは準決勝と決勝の2日間の演技の結果が順位につながるので、準決勝で力を出しきれなかったことが優勝したチームとの差になってしまいました。1本、1本、完璧な演技がで

きる完成度が必要なので、ここで得た経験を後輩たちには来年につなげて欲しいです」

3年生が10人、2年生と1年生がそれぞれ3人のチーム。ジャパンカップでの初優勝は逃したものの、来年1月に開催される全日本高等学校チアリーディング選手権大会ではディビジョン1の優勝候補になるだろう。

選手たちを見つめながら、如水館のコーチは何度も同じ言葉を繰り返していた。

「次は絶対に勝つ。次は絶対に勝てる。ここまで来たんだから」

悔しさとともに、手応えと自信をつかんだ大会だった。次こそは、目標を現実のものにする。その道筋は、確かに見えた。

写真提供：「デイリースポーツ・プライム」

本サイトの記事、写真の転載はご遠慮ください。無許可の転載・複製は法律により罰せられます。
Unauthorized reproduction or duplication is punishable by law.